

園だより 10 月

おのこの部分は分に応じて働いて体を成長させ、

自ら愛によって造り上げられてゆくのです。

エフェソの信徒への手紙 4 章 16 節

まだ夏の名残を感じさせる日々が続いた 9 月。コロナの不安は拭えない園生活の毎日でしたが、園全体の安全は守られ、子どもたちが変わることなくそれぞれの想いを大切に過ごせましたこと、何より感謝でした。保護者の方々のご協力により、夏の間楽しんだプールが屋上に仕舞われ、戻って来た広い園庭やそれぞれの場所で更に活発に動き始めた子どもたち。想いが溢れていました。

例年、幼稚園の夏休み期間に私たち保育者は研修での学びの時を持ちます。今年度も様々学びました。コロナ禍だからでしょうか、子どもたちに視点を当てての研修より、この様な状況の中、保育者がどの様に子どもたちを理解し、共に過ごすことがより大切であるか、保育者に視点を当てての研修が多かったように思います。目に見えないウイルスの恐怖に行動範囲が狭まり、新しい生活習慣などの徹底が課せられ、知らず知らずにストレスを感じることが増えている子どもたち。コロナ禍の時、命を守るためには致し方ないことと思いつつも、それによって失われる子どもたちの成長に欠かせない大切なこと、大切なときを思うと、割り切れない思いに心が締め付けられ、思い悩みながら過ごしている一年半ほど。研修によって子どもたちと向き合うときの視点、思考の柔軟性や方向性、今の時に重要な学びをさせて頂き、糧となりました。

様々な状況の中、動きながら考え思い思いに表現する子どもたち。時に、保育者(大人)の想像を遥かに超えることも。その様な時、子どもたちのその想いや表現をどれほどに肯定的に受け止め、共感し向き合えるか。ややもすると、保育者の価値観や常識を基に安易な言葉かけや、表面的に捉えた対応をしているのでは、日頃の子どもたちとの関りを振り返りながらの学びでした。

研修で深く心に留まった本の一節がありました。「子どもたちがであう事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。」レイチェル・カーソンの「センス オブ ワンダー」です。昔に読み感動し大切にしている本の一冊でもあります。心が引き締まりました。神様の恵みに溢れる豊かな秋の 10 月。子どもたちの想いをより大切に過ごして参りたいと願います。保護者の皆様と共に。

園長 駿河 幸子

